

---

# 真実

タイム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真実

### 【Nコード】

N4113V

### 【作者名】

タイム

### 【あらすじ】

あの声とあの人の声。あの瞳とあの人の瞳。

何で同じなの？どうして一緒なの？

まじっく快斗です

## 前半

うわ〜さむーい……

こんな所にホントにキッド来るのかな？

あのコナン君が話してたから本当だと思っただけだなあ

あと1分でキッドの予告時間

もうちょっと…

「キッドだ〜！〜！」

お父さんの叫び声が聞こえる

「では中森警部…また月下の光の中でお会いしましょう…」

キッドの声が聞こえる

あれ？この声どっかで…

その時青子の目の前に白い何かが舞い降りる

「キ、キッド…」

少しキッドの目が大きく見開かれるが、すぐに元に戻る

「これは中森のお嬢さん…こんな所においては危険ですよ」

この声は…

大好きなあの人の声と…

同じ…

違う！快斗がキッドなわけないもん！！

違う…絶対に…

「では、またどこかでお会いいたしましょう…」

青子の手を取り口付ける

キッドが顔をあげた時目が合った

澄んだブルーの瞳

どこまでも吸い込まれそうな綺麗な純粹な瞳

あの子の…！あの子と同じ目…

毎日見ているあの目だ…

青子がボーっとしている間にキッドは居なくなつたみたいだった

でも、そんなことはどうでも良かった

気がかりは…

キッドのあの声と快斗のあの声。

キッドの瞳と快斗の瞳。

なんで？何であそこまで同じなの？

それに、それに……！

キッドがいつもやる大掛かりなマジック

大好きなあのマジックと雰囲気……一緒……

どうして？何で？

そんな言葉が頭をグルグル回る

嘘よ、こんなの嘘よ！

『キッド＝快斗』

この真実

本当の真実

夜もふけてきた廃ビルの屋上で今起こったことに今も信じられない  
でいた青子であった……



## 後半

次の日…

昨日のことがショックで夜も眠れず、朝も早く起きた

食欲もなくて、いつもよりずっと早く学校へ行った

誰もいない教室で自分の机に座って昨日のことを考える

やっぱりあの事は本当なの？

どうしよう…快斗に合わせる顔ないよ…

「あれ？青子、早いね〜」

いつも1番にくる友達が声を掛けてくる

「どうしたの？そんなに暗い顔して…黒羽君関係？もしかして…」

ビクッ

何で？わかつちゃうの？

「あ、凶星？」

クスクス…と笑う

「青子はわかりやすいね〜」

教室にどんどんクラスメートが入ってくる

「青子おはよー！」

「おはよ…」

「あれ？青子暗いねえ…黒羽君と喧嘩でもした？」

うっ…と言葉に詰まる

「あら…冗談だったのに…ホントにしたのね」

「謝りなよ！何があったかは知らないけどさ青子が暗いところっちも嫌になっちゃうよ〜」

「そうそう！…あ！噂の旦那さまの登場だよ〜」

「よっあ〜おこ」

いつもの軽いノリで快斗が話しかけてくる

その快斗の顔を見たら、涙が溢れてきた

ダメ！こんなところで泣いちゃダメ！！

心の中とは裏腹にどんどん涙がたまっていく

遂に目から涙がポロポロと出てくる



「うっ…うっ…」

「あ、青子お??何泣いてんだよ!??お、俺なんかしたか?」

快斗が慌て始める

友達が不思議そうに尋ねる

「喧嘩したんじゃないの?」

「してねーよ!全然わけがわかんねーんだけど…青子、俺なんかしたか?」

「…か、快斗のことぐらい、声で分かるよ…何で…何で言ってくれなかったの?」

「は?」

「何で…何でよ…何で…」

何で…を連呼する青子に快斗を始め、周りにいる皆が困った顔をする

「あ、青子?何が言いたいんだ?」

「昨日の夜のこと!…快斗のこと位、声聞いて分かるよ!目見ただけで分かるよ!」

どっどっ言葉が溢れていく

「あ……………」

快斗が何かに思い当たったように顔を張りつめる

「え？何のこと？何があったの??」

何も知らない友達たちはポカーンと傍観している

「どうして?…言ってくれば良かったのに…ヒドいよ…青子が軽蔑するとも思ったの?…快斗のことそんな風に思うわけじゃない!…何だよ…」

悔しそうに快斗が顔を背ける

「もう青子分かっちゃったんだから……」

言いたいことを全部吐き出した

「くそっ……」

快斗がボソツと呟き、いきなり青子の手を引いて走り出す

「ちよつと快斗君!?青子!??」

後ろから叫ぶ友達を無視してどんどん走っていく

いつもなら文句を言う青子も口を固く結んでいる

2人が着いたのは屋上

2人の間に風が通り過ぎる

「ゴメン……………」

「そんな言葉は聞きたくないよ！」

「理由わけだろ？」

「…そう」

「わけ…ねえ？親父を殺した奴らをぶつ潰すため…だな」

「え？快斗のお父さんは事故じゃなかったの？」

「ホントは殺されたらしいんだ…」

「そっか…」

「あと、8年前のキッドは親父だったんだ…それで奴らに狙われてさ…命も狙われてるし、迷惑かけたくなかったから…」

「……………」

「ゴメンな……………」

「……………うん」

「じゃあ、戻るか」

2人並んで無言で歩く

凄い気まずいよ・・・

どうしょ・・・

いつもだったら憎まれ口を絶対叩く快斗も全然口を開かない

こうなったら・・・・・・

「快斗のバカバカバカバカ!!」

「はあ?」

ポカーンと呆れる快斗

「バカバカバカバカバ快斗!!」

ピキッと切れる

「何だよ!バカバカって!オメーこそアホ子じゃねーか!!」

「だってバ快斗だもーん!」

「お子様アホ子のくせに・・・」

「お子様じゃないもん!」

「高2にもなって自分の事”青子”っていつヤツがお子様じゃないわけねーだろ!」

「他にも絶対いる!」

「見たことねーなあ！」

「探せばいるってば！」

「このオレ様が知らねーんだから！」

「そんなの分かんないもん！」

「無駄足掻きはやめることだな！」

「何よ〜!?!」

「あらあら・・・もう仲直り？」

いつの間にか教室に来ていたようだ

快斗と青子の喧嘩声が聞こえたようでクラスの皆がニヤニヤしながらこつちを見ている

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

顔を見合わせる快斗と青子

「・・・・・・・・クスッ」

何故か笑いがこみ上げてきた

「クスクスクスクス・・・・」

何でだろ・・・ナンでかな？

「2人して何笑ってるんだ？」

「な、何でもないぜ・・・でも、止まんない・・・」

「何でかわかんないけど・・・何か笑っちゃう！」

何でだろう！・・・でも、何か楽しい・・・

あのまんまだったら、もう快斗と話せなくなるかと思った

でもちよっとしたことでまた話せるようになった

それが・・・それが、嬉しいんだ

毎日のことがとっても楽しいんだ

日常ってやっぱりいいな・・・

今まで快斗が青子を騙していた事実は変わらない

でも話してくれたことでもっと、もっと彼に近づけた

そんな気がする

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4113v/>

---

真実

2011年10月9日03時54分発行